

## 第1部

### 1. 独自の道へ、デカルトの決心

良識はこの世で最も公平に分け与えられているもののようです。それは、誰もが良識なら十分に身に具わっていると思っているからでしょう。他のことに関しては気難しい人たちがさえ、良識については、自分がいま持っている以上を望まないのが一般的だと言えるからです。この点で多くの人たちが思い違いをしているとは思えないのです。

こうしたことが立証しているのは、良識とか理性とか呼ばれているもの（即ち、正しく判断し真と偽を区別する能力）が全ての人に生まれつき平等に具わっている、ということです。だから、私たちの意見が分かれるのは、ある人が他人よりも理性があるということによるのではなく、私たちが思考を異なる道筋で導き、同一のことを考察してはいないことから生じるのです。

そこで言えることは、良い精神を持っているだけでは充分でなく、大切なのはそれを良く用いることだということです。大きな魂ほど、最大の美德とともに最大の悪徳をも生み出す力を持っています。また、きわめてゆっくりと歩む人でも常に真直ぐな道をたどるなら、走りながらも道をそれてしまう人よりもはるかに前進することができます。

デカルトはこのように考えながらも、自分としては、自分の精神がどんな点でも普通の人以上に完全だなどと思ったことはありませんでした。それどころか、他の人たちと同じくらい頭の回転が速く、想像力がくっきりと鮮明で、豊かで鮮やかな記憶力を持ちたいとしばしば願ったほどなのです。

そして、これらの特質以外に、精神の完成に役立つものを知らないときえ言っています。その理由は、理性すなわち良識が私たちを人間たらしめ、動物から区別する唯一のものであるだけに、各人のうちに完全に具わっていると思いたいし、その点で哲学者たちに共通する意見に従いたいから、ということのようです。

哲学者たちによれば理性の多い少ないは、同じ「種」における「固体」の、「形相」すなわち本性によるのではなく「偶有性」どうしの間にあるだけだ、ということのようです。

そこでデカルトは次のように言います。

-----

遠慮なく言います。わたしは若いときから、わたしを考察と格率へ導いたある道に踏み入る多大な幸運に恵まれたと思います。それらの考察と格率（自らの学問、思想や生を導く規準）によって一つの方法をつくりあげたのです。

そしてこの方法によって自分の知識をだんだんに増やしていき、わたしの人並みの精神と短い生の達しうる最高点にまで、少しずつ知識を高めていく手立てがあると思いました。というのも、その方法からすでに多大の成果を収めてきましたから、わたしは真理の探究においてすでに成しとげたと思う進歩に非常な満足感をおぼえずにはられませんし、未来にたいしても大きな希望を抱かずにはられません。

わたしが自分を判断する場合にはいつも、自惚れるより疑心を抱くほうでしたし、また、哲学者の眼で万人のさまざまな行為や企てを眺めますと、ほとんどが無益で無用だと見えるのですが、それにも拘わらずそう感じたのです。

人間の職業、純粹な人間としてなせる職業のうちに、確かに優れた重要なものが何か一つでもあるとすれば、それこそわたしが選んだ仕事だと、信じたいほどです。

しかし、わたしが間違っていることもありうることです。金やダイヤモンドだと思っているものも、ただの銅やガラスに過ぎないかもしれないのです。自分に関することでは、どれほど考え違いをしやすいか、友人の判断がわたしたちに好意的であるとき、どれほど疑わしいものになりかねないか、わたしも知っています。

けれどもこの話のなかで、自分がどういう道をたどってきたかを示し、一枚の絵に描くように自分の生涯を再現できれば、わたしにとってこのうえない喜びとなるでしょう。なぜならば、各人がそれについて判断できるだけでなく、世間の評判から人びとの意見をすることは自己教育の新しい手段であり、わたしが用いてきたものに加えることができるからです。

-----

以上のようにデカルトの目的は、自分の理性を正しく導くために従うべき万人向けの方法をここで教えることではなく、どのように自分の理性を導こうと努力したかをみせるだけだったのです。教えを授けることに携わる者は、教える相手よりも自分の知性がまさると見るのは当然のことです。それゆえ、どんなに小さな点においても誤るところがあれば、その点で非難されることとなります。

けれども、デカルトがここに語ることは、一つの話として、あるいは、一つの寓話とも

言えますが、そういうものとしてだけ公開されたのであって、そこには真似てよい手本とともに、従わないほうがよい例も数多く見られるだろうと、彼自身が語っています。

このような公開にデカルトが期待したのは、これがだれにも無害で、しかも人によっては有益であり、またすべての人が彼のこの率直さをよしとしてくれることでした。

デカルトは子供の頃から文字による学問で養われてきました。そして、それによって人生に有益なすべてのことについて明晰で確実な知識を獲得できると説き聞かされてきましたので、これを習得しようとするこのうえなく強い願望をもっていました。

けれども彼は、それを終了すれば学者の列に加えられる習わしとなっている学業の全課程を終了すると、まったく考えを変えてしまいました。それは、多くの疑いと誤りに悩まされている自分に気がつき、勉学に努めながらもますます自分の無知を知らされたという以外、何も得ることがなかったように思えた、という理由からでした。

しかし、彼がいたのはヨーロッパでもっとも有名な学校の一つで、地上のどこかに学識ある人びとがいるとすれば、この学校にこそいるはずだ、と彼は思っていました。デカルトはそこで他の人が学んでいたことはすべて学びました。

しかも、教えられた学問だけでは満足せず、もっとも秘伝的で稀有とされている学問（占星術や錬金術、手相術、光学的魔術など）を扱った本まで、手に入ったものはすべて読破したのでした。

そのうえ彼は、他の人たちが自分をどんなふう判断しているかも知っていました。学友のなかにはすでに先生のあとを継ぐよう決まっている者も何人かいましたが、彼が学友たちにくらべて劣ると見られているとは思いませんでした。そして、自分たちの世紀はこれまでのどんな世紀よりも華々しくて、卓越した精神の持ち主に富んでいると思っていました。

こうした理由でデカルトは、他のだれについても自分を基にして判断する自由、先に人びとが彼に期待させたような学説はこの世に一つもないのだと考える自由を選びとったのでした。

だが、デカルトは学校で勉強する教科を尊重しなかったわけではありません。彼は次のように語っています。

-----

わたしは以下のことは知っていました。

学校で習う語学（ギリシャ語、ラテン語など）はむかしの本を理解するのに必要だし、寓話の楽しさは精神を目覚めさせてくれます。歴史上の記憶すべき出来事は精神を奮い立たせ、思慮をもって読めば判断力を養う助けになります。

すべての良書を読むことは、著者である過去の世紀の一流の人びとと親しく語り合うようなもので、しかもその会話は、かれらの思想の最上のもものだけを見せてくれる入念な準備のなされたものなのです。

雄弁術には、くらべるものがない力と美があります。詩にはうっとりするような繊細さと優しさがあります。数学には精緻をきわめた考案力があり、これが知識欲のさかんな人たちを満足させるのにも、あらゆる技術を容易にして人間の労力を軽減するのにも、大いに役立つことができるのです。

習俗を論じた書物は、いかにもためになる教訓と徳への勧めを数多く含んでいます。神学は天国に至る道を教えてくれます。哲学はどんなことについても、もっともらしく語り、学識の劣る人に自分を賞賛させる手だてを授けてくれます。法学、医学、その他の学問は、それを修める人に名誉と富をもたらします。

そして最後に、これらの学問を、どんなに迷信めいたものやどんなに怪しげなものまでもことごとく調べあげたことは、その正しい価値を知り、欺かれないよう気をつけるためによいことなのです。

---

しかしデカルトは、語学ばかりか、古い本を読むことにも、そこに書かれた歴史や寓話にも、もう十分に時間を費やしたとっていました。というのも、ほかの世紀の人びとと交わるのは、旅をするのと同じようなのだと受け止めていたからです。それは次のようなことです。

さまざまな民族の習俗について何がしかの知識を得るのは、自分たちの習俗の判断をいっそう健全なものにするためにも良いことですし、またこの習俗も見たことのない人たちがやりがちなように、自分たちの流儀に反するものはすべてこっけいで理性にそむいたものと考えたりしないためにも良いことなのです。

けれども旅にあまり多く時間を費やしますと、しまいには自分の国で異邦人になってしまいます。また、過去の世紀になされたことに興味をもちすぎると、現世紀におこなわれていることについて往々にしてひどく無知なままとなります。

そのうえ寓話は、実際にありえない多くの出来事を、ありうるがごとく想像させます。また、どんなに史実通りの歴史であっても、読みごたえのあるようにと事実の価値を変えたり増やしたりはしないまでも、少なくとも、およそ平凡でぱっとしない細部はたいいてい省略してしまいます。

そのため、残りの部分もあるがままには示されなくなりますし、そこから手本を引きだして自分の生き方を律する人たちは、われらが騎士物語に出てくる遍歴騎士のような奇行におちいり、身の程知らずの計画をもくろみかねないのです。

デカルトは雄弁術をたいへん尊重していましたし、詩を愛好していました。しかしどちらも、勉学の成果であるよりも天賦の才によるものだと思っていました。

きわめて強い思考力をもち、自己の思考をよく秩序づけて明晰で分かりやすいものにする人ほど、たとえ低地ブルターニュ方言しか話せず、修辞学など習っていないなくても、自分の主張をすることをいつもうまく人に納得させることができるというのです。

それは、着想がいかにも人の意にかない、しかもそれを文飾と優美の限りをつくして表現できる人びとは、詩法など知らなくとも最良の詩人であることに変わりはないからです。

デカルトは数学について次のようなことを語っています。

-----  
わたしは何よりも数学が好きでした。論拠の確実性と明証性のゆえにです。しかしまだ、その本当の用途に気づいていませんでした。数学が機械技術にしか役立っていないことを考え、数学の基礎はあれほどゆるぎなく堅固なのに、もっと高い学問が何もその上に築かれなかったことを意外に思ったのです。

これと反対に、習俗を論じた古代異教徒たち（ストア派）の書物は、いとも壮麗で豪華ではありますが、砂や泥の上に築かれたにすぎない楼閣のようなものでした。かれらは美德をひどく高く持ち上げて、この世の何よりも尊重すべきものと見せかけています。

けれども美德をどう認識するかは十分に教えないし、かれらが美德という美しい名で呼ぶものが、無感動・傲慢・絶望・親族殺しにすぎないことが多いのです。

-----

デカルトは自分たちの神学に敬意を抱き、だれにも負けないくらい天国に到達したいと望んでいました。しかし、天国にいたる道はどんな無知な人にも、もっとも学識のある人に劣らず開かれていること、天国へ導く啓示された真理はわれわれの理解力を越えていること、それがきわめて確かなものであることを学び知りました。

そうなりますと、これらの真理を自分の脆弱な推論に従わせる勇気などなかつたろうし、それらの真理の検討を企てて成功するには、天からなにか特別な加護を受け、人間以上のものであることが必要だ、と彼は考えていたのです。

哲学については、次のこと以外は何も言うまい、と彼は語っています。

哲学は幾世紀もむかしから、生を享けたうちで最もすぐれた精神の持ち主たちが培ってきたのですが、それでもなお哲学には論争的にならないものはありません。したがって疑わしくないものは一つもないということです。

これを知って、彼は哲学において他の人よりも成功を収めるだけの自負心は持てなかったのです。それに、同一のことがらについて真理は一つしかありえないのに、学者たちによって主張される違った意見がいくらでもあるのを考えあわせて、彼は、真らしく見えるにすぎないものは、いちおう虚偽とみなすことにしたのです。

次に、ほかの諸学問については、その原理を哲学から借りているかぎり、これほど脆弱な基礎の上には何も堅固なものが建てられなかったはずだ、と彼は判断しました。それらの学問が名誉や利益を約束してくれても、それだけでは学ぶ気は起きなかったのです。

なぜなら、幸いにして彼は、暮らしのために学問を職業とせざるをえない境遇にあるとは思っていませんでしたし、キクニ派気取りで榮譽をさげすむことを標榜するのではありませんが、名目だけの肩書によってしか得られそうもない榮譽など重んじなかったからです。

そして最後に、悪しき諸学説にいたっては、彼はすでに十分にその値打ちを見定め、錬金術師の約束にも、占星術師の予言にも、魔術師のまやかしにも、知らないことまで知っていると言いふらす人間どもの手管や広言にも、もうだまされまい、と思っていたのです。

以上の理由から、デカルトは教師たちへの従属から解放されるとすぐに、文字による学問（人文学）をまったく放棄してしまったのです。そしてこれからは、自分自身のうちに、あるいは世界という大きな書物のうちに見つかるかもしれない学問だけを探求しようと決心し、青春の残りをつかって次のことをしました。

旅をし、あちこちの宮廷や軍隊を見、気質や身分の異なるさまざまな人たちと交わり、さまざまな経験を積み、運命の巡り合わせる機会をとらえて自分に試練を課し、いたるところで目の前に現れる事柄について反省を加え、そこから何らかの利点をひきだすことに努めたのでした。

というのは、各人が自分に重大なかわりのあることについてなす推論では、判断を誤ればたちまちその結果によって罰を受けるはずなので、文字の学問をする学者が書齋でめぐらす空疎な思弁についての推論よりも、はるかに多くの真理を見つけ出せると思ったからです。

学者の思弁は、それを真らしく見せようとすればするほど、多くの才知と技巧をこらさねばならなかったはずですから、それが常識から離れれば離れるほど、学者が手にする虚栄心の満足もそれだけ大きいのです。それ以外には何の益ももたらさないのです。

だがデカルトは、自分の行為をはっきりと見、確信をもってこの人生を歩むために、真と偽を区別することを学びたいという、何よりも強い願望をたえず抱いていました。

たしかに、他の人びとの習俗を考察するだけだった間は、デカルトを確信させるものはほとんど見いだされませんでしたし、そこにも、前から哲学者たちの意見のあいだに見られたのと同じくらいの食い違いが認められました。

したがって、そこからデカルトが引き出した最大の利点は次のことでした。それは、自分たちにはきわめて突飛でこっけいに見えても、それでもほかの国々の大ぜいの人に共通に受け入れられ是認されている多くのことを見て、ただ前例と習慣だけで納得してきたことを、あまり堅く信じてはいけないと学んだこと、でした。

こうしてデカルトは、自分にとっての自然（生まれながら）の光をさえぎり、理にしたがう力を弱めるおそれのある、たくさんの誤りからだんだんに解放されたのでした。

しかし、このように数年を費やして世界という書物のなかで研究し、いくらかの経験を得ようと努めた後のある日、デカルトは、自分自身のうちでも研究し、とるべき道を選ぶために、自分の精神の全力を傾けようと決心したのです。

このことは、自分の国、自分の書物から一度も離れなかった場合にくらべて、はるかにうまく果たせたとデカルトには思えたのでした。